2017年度公開気象講演会『「大雨災害」に備える』実施報告

教育と普及委員会

日本気象学会教育と普及委員会では，春季大会の開催期間に合わせて，最新の気象学に関する研究成果や世間的に関心の高い事柄について，一般の方々にわかりやすく解説することを目的に，公開気象講演会を開催している．公開気象講演会は大会期間中の週末に開催し，参加費も公開気象講演会の聴講に限り無料としている．2017年度は，一般社団法人日本気象予報士会の後援を受け，『「大雨災害」に備える』と題して，2017年５月28日（大会４日目）に開催した．

毎年，日本各地で大雨が発生し，土砂崩れ，河川のはん濫，家屋の床上・床下浸水などの甚大な災害がもたらされている．近年では，平成26年８月の広島県での大雨や平成27年９月関東・東北豪雨などがあり，これらの大雨によって多くの尊い命が失われた．今回の公開気象講演会では，「大雨」の気象学的な理解を深めるとともに，特に「大雨」に対する防災・減災に焦点を当て，防災気象情報の出し手，伝え手，受け手のそれぞれの立場から，さまざまな経験や意見などを紹介して頂いた．講演題目と講師名を，第１表に掲げる．また，各講演の要旨とパネルディスカッションで扱ったテーマを以下に示す．

第１表　2017年度公開気象講演会の講演題目と講師名（敬称略）．

趣旨説明 津口裕茂（気象研究所）
積乱雲の発生・組織化と大雨の発生メカニズム 加藤輝之（気象庁観測部）
気象庁が発表する大雨に関する防災気象情報 髙橋賢一（気象庁予報部）
テレビと防災情報 木原　実（気象予報士/防災士）
市町村の防災気象情報を活用した防災・減災対応 出水田正志（龍ケ崎市役所）
パネルディスカッション 司会：津口裕茂 パネリスト：加藤輝之，髙橋賢一， 木原　実，出水田正志， 平松信昭（日本気象協会）

「積乱雲の発生・組織化と大雨の発生メカニズム」
加藤輝之（気象庁観測部）

大気状態が不安定なときに複数の積乱雲が繰り返し発生し，連結して組織化することで大雨はもたらされます．本講演ではまず，不安定な大気状態とはどういったものなのか，その不安定の中でどのように積乱雲が発生・発達するのかをわかりやすく説明します．また，土砂災害などを引き起こす“集中豪雨”や都市部を中心に内水氾濫をもたらす“ゲリラ豪雨”とも呼ばれる“局地的大雨”について，過去の実例を挙げて，その形状や発生メカニズムも踏まえて解説します．

「気象庁が発表する大雨に関する防災気象情報」
髙橋賢一（気象庁予報部）

気象庁が発表する防災気象情報について，大雨に焦点を当てて，どの様な情報を段階的に発表しているか，また，その情報をどの様に活用して欲しいと考えているか，出し手側の思いを紹介します．また，今年度の出水期に予定している改善についても簡単に紹介します．

「テレビと防災情報」
木原　実（気象予報士/防災士）

インターネットの普及とともに携帯電話の機能も劇的に進化し，もはや人類の第二の脳ともいえるスキル

© 2018　日本気象学会

を持つものもあらわれています．また，パソコンやタブレットでも防災情報をいつでも簡単に確認できる時代になりました．そんな時代にテレビの地上波は相変わらず同じ時刻に同じキャスターが天気予報や防災情報を伝え続けています．今の時代にこの制約の多いテレビの地上波での防災情報の伝え方を考えます．

「市町村の防災気象情報を活用した防災・減災対応」
出水田正志（龍ケ崎市役所）

龍ケ崎市において最近5年間の特性ある風水害対応を教訓に，市町村の責務である住民の生命，身体を災害から保護するかを具現してまいりました．また，気象庁の気象予報士派遣モデル事業により，防災担当職員は気象庁から発表される防災気象情報を理解する能力が飛躍的に向上しました．これらを踏まえ，当市において防災気象情報等（インフォメーション）を災害発生予想（インテリジェンス）に分析検討し，更なる防災・減災対応としていかに具現していくかその方向性ついて紹介していきます．

パネルディスカッション
①防災気象情報の正しい理解のために必要なこと・もの
②マスメディアを通じた防災気象情報
③防災気象情報を受け取っての具体的な対応・行動

今回の公開気象講演会には150名を超える参加者があり，会場はほぼ満席であった．参加者のうち，アンケートにお答え頂いた約60％が学会員ではない方々であった．「大雨」は，気象学にとって重要な研究対象であるとともに，社会に与える影響が甚大であるがために，今回のテーマが広く一般の方々の興味を引くものであったと言える．ご多忙の中，講演を快諾して頂き，充実した講演資料を作成して頂いた講師各位に感謝申し上げる．

公開気象講演会は，気象学の研究成果を一般の方々へ還元する有効な場である．また，研究者が一般の方々に接することで自らの研究と社会の接点を確認できる貴重な機会でもある．今後とも，気象学会内の研究連絡会・委員会や研究者とも協力しつつ，充実した公開気象講演会の企画・運営を図っていく所存である．